
神とは全知全能である。

神苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神とは全知全能である。

【Nコード】

N6544Y

【作者名】

神苑

【あらすじ】

神とは全知全能であるべきだ。

俺の立場から言わせてもらえば、全知全能であって欲しかった。だがそれは俺の希望的観測でしかなく、現実には甘くない。

神なんて存在しなければ良いのに。

第一話

神とは全知全能である。

その事実は神を信ずる者全てが肯定する共通の認識なのだろう。俺が出会うことになった神自身も自分は全知全能だと言っていた。

そのことを前提に俺の今の状況を考えるとおかしいのだ。なんで俺は神に「間違っただけで殺しちゃった☆」なんて言われたんだ！ 絶対におかしいだろう！

神が全知全能の存在だと言うのなら間違いないで絶対になり得ない。もしも間違えたなんてのたまいやがったら、明らかに故意であると今の俺ならば理解出来る。

だとしたらなんで俺を殺す必要があった？

ごく普通の高校生であった俺を、とーっても大事な書類にコピーし忘れたことによって死の運命を引き寄せてしまったとかいう全知全能の神らしからぬ言い訳をしてまで、なんで俺を殺す必要があるんだ。

特に運動能力に優れているわけでもなく、知力に優れているわけでもない。むしろ全ての人間の平均値をいつも叩きだしてしまうような平凡な高校生の俺を故意に殺す……その理由が皆目見当もつかん。

「アキラさま。お部屋の掃除があるので出ていってください」

俺を殺しやがった神の思惑について椅子に座りながら考えていると、ラミエルさんが声をかけてきた。

ラミエルさんとはズバリ天使である。察しの言い方はエヴァにそんな使徒いたなあぐらひは思うかもしれない。うんまあ、その元ネタの天使さまですよ。幻視を支配する存在であり、その力で地上の人間に神からの黙示を伝えるとされているらしい。

別に俺は宗教にハマっていたり神話にのめり込んでいたわけではないから、ご本人から聞いたことなんだけどさ。驚きなのは天使がエヴァを知ってたことぐらいか。

そんなラミエルさんがなぜ俺がいる部屋の掃除を任されているかと言うと、

「早く出てけコノヤロー。掃除の邪魔すんなよ」

あれ？　なんかラミエルさんの笑顔が怖い。そんな怒った顔していては小じわが増えますよ？

つーわけで、とつと部屋から出ていくことにする。これ以上あの場に留まっていたではラミエルさんに何をされるかわからないもん。身の危険を感じたんだもん。

部屋から出るとそこに広がっているのは精神と時の部屋。おっと、間違えた。ただただ真っ白な空間。この空間にあるのは俺が出入りする扉を除けば、真っ白な空と真っ白な大地のみ。だから精神と時の部屋と俺は名付けた。これには同意を得られるだろう。

「ああ、クソー。今回の掃除は一体何年かかるんだろ？」

片をガックリ落とす。前回はおよそ五十年だったか。きっと今回も同じくらいの時間掛かるんだろうな……。

ちなみにラミエルさんの名誉のために言っておくと、彼女は決して掃除が苦手なわけでもドジっ子なわけではない。昨今問題となっている片づけられない女子ではなく、むしろ掃除が出来る素晴らしい女子である。

ただ、さきほどまで俺がいた部屋が広すぎるのだ。

等間隔に並べられた本のぎっしり詰め込まれた本棚。それらが一辺で数えると億だとか兆だとか人間である俺には考えられないほどの数が並べられており、蔵書数なんて数えたくもない。

そんな馬鹿みたいに広い部屋だからこそ、五十年かかるわけである。むしろ一人で五十年で済むとはさすが天使さまと言わざるを得ない。

「さて、何すっかな」

暇である。何もない空間で一体何をすれば良いのだろうか。その答えが今すぐピキーンと脳内に閃くことを渴望する俺であるが、そんな都合が良いことが起こるわけがなかった。

とりあえず、真っ白な大地にゴロンと横になる。それ以外の選択肢はないし、いつまでも立っていてもただただ疲れるだけである。

これ以上疲れるのはごめんだ。

一先ず瞳を閉じ、意識を手放すことにする。それがもつともこの無為なる時間を経過させる効果的な手段。今はそれに頼るしかない。一万年の牢獄。否、当初は一万年の経験を積む場だったっけな？もうどちらでも良いよ。俺は早くこの場から解き放たれたいんだ。

あの日。神は言った。

——ごめんごめん。ちょっとばかり手元が狂って、君の運命が記された書類にコーヒーを零しちゃってね。色々と手を尽くして元の状態に戻そうと努力してみたんだけど、どうにも上手くいかなかったね。しょうがないから君には死んでもらうことにしたんだよ。

でも、君の死はこっちのミスなわけじゃん。そんなわけで全知全能たるこの神が君に新たな人生をプレゼントしてあげることにしたわけなんだよ。しかもそれだけじゃ悪いと思ったから特典付きで。お得だね！

それで君には転生してもらおうわけだけれど、君の元居た世界には

こちらの事情で転生させてあげられないんだよね。だから君が転生する世界はランダムに選ぶことにしたんだよ。別に君の要望を聞いてあげてもいいんだけど。それじゃあ公平なる神として如何なモノかと思ったから却下したよ。

そんなわけでの特典だよ！

君には生まれる前に一万年のアドバンテージをあげようかと思う。イングリッシュが苦手だった君にわかりやすいように優位性をあげると言い直しておこうかな。

本当は強靱な肉体や莫大な魔力、完全記憶能力みたいなお手軽なチカラを君にあげようかとも思ったんだけど、やっぱり神として試験を与えるべきだと判断したよ。

そこで出てくるのが一万年という時間。好きに使うと良い。身体を動かす場所も、この世の全てのことが収められた森羅万象書庫も君に貸し出そうじゃないか。

努力しろ凡人。この時間こそが君へのプレゼントだ！

「とは言われたものの、やっぱ無理だよなあ……」

それが導き出された俺の結論である。

初めのうちは来世に想いを馳せて意気込んで、身体を鍛えてみたい、知識を蓄えてみたけど、一年目で挫折した。むしろ一年も頑張っていた俺を褒めてやりたい。俺は龍玉の登場人物たちみたいに精神力は強くないのだ。

だって、やることないんだもん。

今では鍛えられた身体の面影はなく、普通の身体。知識に至ってはほとんど忘れましたよ。というより、何から憶えたらいいのかわからんのよ！

最近テキストに本を読んで時間を潰しているが、それだけで知

識が身に着くわけでもないし、本当にただの暇潰しだ。

だがその暇潰しもラミエルさんの森羅万象書庫お掃除計画により部屋を追いだされたとあっちゃ、することが出来ない。

あつ、そーいえばまだラミエルさんが掃除をする理由を語ってなかったな。

まあ勿体ぶるのもアレなんで簡単に言うと、神よりお掃除係を任命されているからである。

何百年か周期でラミエルさんはここにやって来るわけで、基本的に俺はぼっちですハイ。

「で、結局は寝るしかないんだよな」

おそらく今回も掃除に五十年くらいかかるだろう。

寝て待つ。やはりそれが最善の手段なのである。

「終わりましたよ」

「あ、ご苦労さまでーす」

扉の近くで寝そべってボーツとしていた俺にラミエルさんが掃除が終わったことを報せてきたので、劳いの言葉をかけて彼女の帰還を見送る。

それでは、と形式上なわけではあるが、メイド服の裾を掴み頭を下げるラミエルさんはそれはそれは綺麗なお方だ。金髪のポニーテールが眩しい。

言い忘れてたな。彼女はメイド服である。とてつもなく重要な事実であるハズなのに失念していたよ。

もはや俺は彼女に会うために時間を消費していると言っても過言

ではない。それだけラミエルさんの魅力はハンパないわけである。さすが天使。良い仕事をしてくれる。

というわけで、去ってしまった天使という名の女神さまであるラミエルさん。しばらくぶりに彼女が掃除をしてくれた森羅万象書庫に入り、テキトーに蔵書を漁る作業に戻る事にする。

だが、毎回のことであるがここで問題が発生する。

この森羅万象書庫は不親切設計なのだ。蔵書の尽くは日本語でない良くわからん言語が並んでいる。地球の言語であるならばまだ読もうという気にもなる可能性が無きにしもあらずな俺であるわけであるが、どう見ても地球の言語以外の言語でほとんどの蔵書は書かれている。

だからラミエルさんが掃除をした後には必ず日本語で書かれている蔵書を発掘するところから始まる。見つけたモノからいつも読んでいる所定のスペースに山積みにする。

だいたいその作業は五年ぐらいかけて行い、やつとこさ五十冊見つかれば良いと言うレベルである。もちろん、全てを読み切ってしまえばまた新たな日本語の蔵書を求め書庫に潜るわけであるが。

なんで、ランダムに蔵書が並べ変えられるんだよ！ 司書はどこだ！ 司書長を呼びたまえ！？

しかも、ラミエルさんは掃除の度にせっかく俺が集めた日本語の蔵書を片づけてしまうのだ。あとはわかるな？

「ふう……」

溜め息が零れる。

「な、何故だッ！？ 何故今回見つけられた蔵書が一冊だけなのだ！」

五年……いや十年探して一冊とか泣きたい。

今俺は無性に日本語に飢えていた。この運良く見つけられた一冊の日本語の蔵書を早く読みたい。だけれども、十冊見つけるまで読まないで決意した五年前の俺を裏切るとでも言うのか!?

「もうやだ。泣きたい」

結局十冊に届いたのはラミエルさんの掃除が終了した日から二十三年後であった。

そして時は流れ約束の日。つまり一万年の時間が流れましたよってわけだ。

いつもと変わらずテキトーに蔵書を漁っていた俺はラミエルさんが来たので掃除の時間と思い少し落胆したわけであるが、聞かされたのは期待していた罵りの言葉ではなかった。

「アキラさま。本日、一万年という神により与えられた時間が終わりを告げます。武を極め、真理を探究するべき時間をただただ無為に過ごした事についての御咎めはありませんので安心して下さい」

「やっと終わったか」

パタンツと良い音を立たせながら本を閉じる。これでこそこの技術を習得するためだけに十年を費やした甲斐があると言うモノだ。

「それでは扉をお潜り下さい。その先に我らが神の御前へと続く道に繋がっております」

深々と頭を下げるラミエルさんのうなじを確認しながらも俺は立

ち上がり、精神と時の部屋に続いていた扉を潜ることにした。

ラミエルさんに別れの挨拶は不要だ。彼女は森羅万象書庫の掃除を任されているだけであり、俺の為に神から使わせられているわけではないからな……と挨拶を忘れたので言い訳を試みる。

扉を潜れば真っ白な空間だった精神と時の部屋と対照的に真っ黒な空間だった。だが、進むべき方向はわかる。規則正しく燭台が並べられ、その蝋燭の先には青色の炎が灯っていた。それを辿っていけばよいのだろう。

歩く……歩く……歩く……歩く……歩く……走る。

「全然辿りつかないんですけど、オイ！」

こうなればやけっぱちで我武者羅に走ることにした。

身体を鍛えていればこんなにも疲れなかったかもしれないし、知識を蒐集していればなんか良いことでも思いつけたかもしれない。

これは墮落していた俺への罰なのかもしれないが、そんなことは知ったこっちゃない。

身体を鍛える知識をくれていたら俺は身体を鍛えていたよ！ ……

……あ、森羅万象書庫で調べれば良かったのか。

日本語以外を読めるようにしてくれていたなら色んな蔵書読んだよ！ ……あ、これも辞書的なモノ探せば良かったのか。

明らかに俺の怠慢のような気がしなくも無くなってきたけど、やっぱり俺は言いたい。

「全て俺を殺しやがった神が悪いんだあああああああああ！！」

なんの思惑があって俺を殺しやがったのかはわからない。

もしかしたら本当に俺を間違って殺してしまったのかもしれない。だったら全知全能の看板下ろしやがれ！

それか本当に全知全能だったら俺を元の状態で生き返らせることも出来るだろ！

俺の魂からの叫びが神の御前に続くと言う真っ黒な空間に木霊する。

必死に貯め込み続けてきた神への呪詛を吐き出し続け、やがて俺は力尽きた。

もういいや、と俺は目を閉じる。

——神なんて嫌いだ。

十
十
十
十
十

「どうするんですか、これ」

「どうしようもこうしようもないな。彼は自分で何もしないことを選んだ。それでいて精神が崩壊していないことに驚嘆させられるが、所詮はその程度の事でしかない」

アキラを真上から覗きこむ存在たちがいた。

小さな段ボールぐらいの大きさの真っ黒な箱。その中心にはアキラがいる。ちなみにこの箱は便利なモノで中の者が移動しようとする周囲の景色が動き、中心からアキラが動くことはない。もっとも、アキラは力尽き倒れ伏している状態なのだが。

そんなアキラを見てラミエルが口を開く。

「ですが、神よ。契約の手前彼を転生させなければなりませんよ」

「もちろんだとも。あの試練は一万年という長きに渡る果てに、何

かを得るものだからね。我々が知覚していないだけで、彼は何かを得ている筈だよ」

神はニヤリと口角を上げる。

「そうだよアキラ。君の考えているように神は決して全知全能ってわけではないんだ。出来ることは出来るし、出来ないことは出来ない。人間と同じさ。もっとも人間よりは出来ることは多いけどね」

「それでは、私はこれで」

アキラに対してそうしたようにメイド服の裾を上げ、礼をしてラミエルは神の前から退場する。

「ああ、楽しみだ。……君は何を得ているんだろうね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6544y/>

神とは全知全能である。

2011年11月20日09時29分発行